

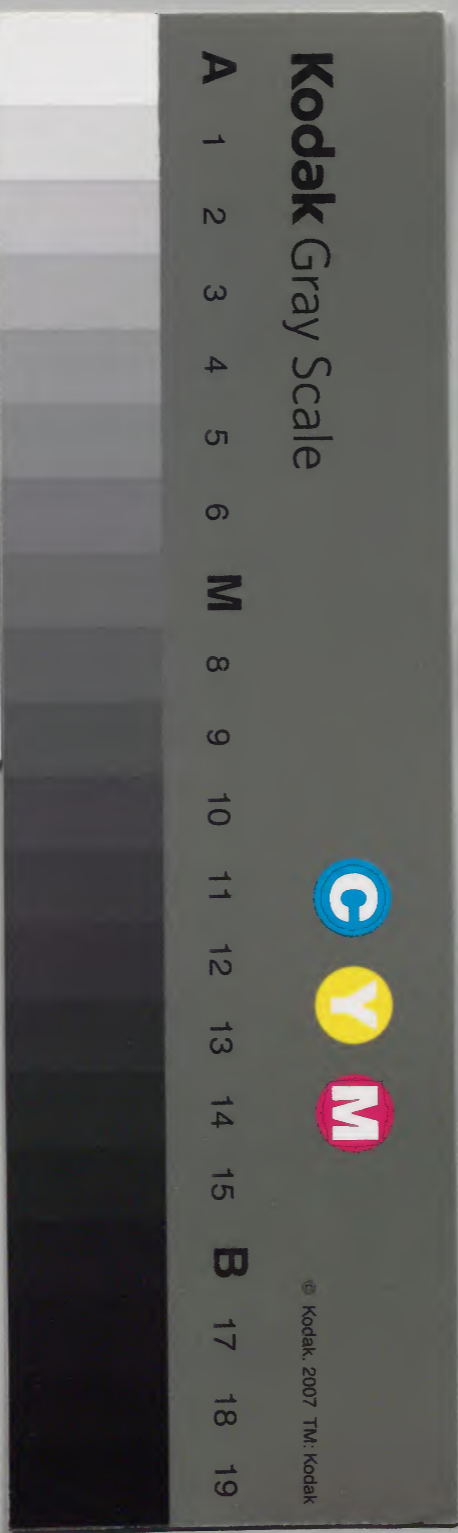
家畧傳

和書門
二八〇九
八六四
四九六
冊架函號類

328
庫文閣内
五七函一八架
二八〇九四
和書類

内閣文庫	
番號	和 28094
冊數	4 (1)
函號	157 328

157-328



山崎美成著
千賀春城訂

名家墨畧傳

發行書肆

江戸下谷御成道

英文藏

遊

明治十五年庚午

讀書ハ博洽ならず考據精確ならず
要すハ世此興廢を詳し古人の
言行をハ今小施ハあり。其史
學子ハ予幼ハて虛弱多病た
嬉戯優遊ハらふ十餘歳とるや
年已不弱冠。自奮ハ書成ハひ學
子志ハ終日几案ハと殆十年。國史
傳紀ハ涉獵ハ且讀ハ且購ハ藏書萬

有餘卷。こまこ加つるも奇貨古物と以て
す。地をくらぐ獨学八固陋寡聞を免れ
次と。出て四方の名士聞人子交り。あこ遠
遊を好む。經歷す。天下の半子及
了。かくて十年を経る。齡をやく四十
子を多老のお小。氣ん。讀書交遊
小虚日おきこと己子二十年。志と遂る。
こ小控る。居をト。書成擁。新知と

ここめす。舊好を修て。老好の志を
養をんをを抄ひ。小。豈をんや年
を追く。不熟。終子荒歳子。心競
たり。これら為小望。失ひ。後来
世路子疎。小東坡。三養を以
て。山陰。金杉村。小屏居。
吟風。美月。日と消す。五年。燈
下窓前。随筆。次。こ

帙をふせり。題し〜三養雜記といふ。あは
古人を尚友するの意をりて。徒然此す
さる小爐を圍み酒を對して。を人の言行
を記して傳ふべきものを集録せり。三冬を
やく畫く。歲除此日。青雲堂を訪ふ。主人
頗義氣あり。一善行を聞て。稱してやま
次。常小直を擧るの志あり。此行状を
編次して梓行せんと請ふ。急速ありんこと

とぬふと。ソウよまて腹稿乃あり。元日
の試筆より。手は但々。淨書する不
ころふ。ころり。四十日。空書をや。成まら
載るところ。此人物の雅俗不拘らず。傳紀
此詳畧をもあつて。考素也。名家畧
傳といふ。青雲堂主人その書と讀みて云。
古人あつて志あり。先生書とよめり
と三十年。あつて得るところありや。予いふ

曾く文教温故軍防知新の二書よその
 一隅を以り。吾事業にとより。屠龍乃
 技子屬す。今や清世此一兩人あり。く
 酒を落たる胸中唯風月のこ。天保十
 二年春日。山崎美成志る。く。

名家畧傳目錄

卷之一

隴本坊昭乘

佐枝政之進

長崎龜女

義僕元助

南川文伯

風外禪師

和泉屋甚助

卷之二

蕙葭堂

長沼澹齋

宮川忍齋

賣酒師

那阿宗助

塚原卜傳

吉益東洞

板坂卜齋

卷之三

偏無為

佐々木玄龍	佐々木文山
皆川湛園	富士谷成章
遊女佐香保	遊女金左夫
綾部道弘	島の勘十郎
妙喜尼	辰巳屋惣多清
服部天勝	了月和尚
石田梅巖	
卷之三	
岡思恭 思亮	松山天姥
水島一也	中津道二
桂松自讓	僧獨立

松雲禪師	志道軒 平賀源内
原雲菴	吉田空景
近松初重母	浮世又多清
菱川吉多清	五葛波
朽野山樂	
卷之四	
若冲居士	一口残翁
泊如和尚	道且居士
僧兆溪	石川文山控書
林道栄	肥後義士
僧古潤	田中丘隅



名家畧傳卷之一

瀧本坊照乘

瀧本坊照乘ありてハ惺公稱と号し松花堂と号し之り書
畫を善くし書法ハ弘法大師此等妙を渴慕し畫
國ハ牧溪和尚の風采を仰希せしなり此國
のウレニ上系と号し書畫を善くし龍管と号し
小人此目を驚かしよるごとくめたり和房と号し殊に秀

江戸 山崎美成編
同 千賀春城訂

大島芙蓉
河保壽
掛原香山
壺井雀翁 多田義俊
残夢和尚
古林見直
通計六十九人
増田鶴接
吉田雨岡
心越禪師 東河
奴の小万
夜雨禪師

終せられしとあり晩年癩をヤミく悪まれしとあり
毛子さや丸なる八間よりか言祖師の口生是非樂衆
苦所聚死亦不喜□夏作逼とそう丸く聖そのおりの
こころ因ぐらんをられ林業此風を朔する命をその
こころ朝を海の日を結さち惜むし似るうされハ藥も竹も
一差年をこそ命朝とお不えされお望さのひと浦公
小物の扱をうかしたまふその心をやうくと押入ハ業を
も飲み并をも免知もせよう一葉もたらんこそよもそ
のあしうあざうとこく藥をのこつ眠まらざとく一
あゆられり春秋五十六申此歳子て寛永己卯九月十
ハ申の肘子短めとや一き子あんや一あつらうらうら

ハその松南山の藤子うきりて形乃南公あり佐川田昌後
うのしうきりてとき贈りたまふ文のおく小
親をおまきくせうつ人をぬくより考て藥とぞ命き
一蓮葉の藝納おつらやわがらん源のちりさうふ
さだらうと考てあまごう人も強うつら身ぞ今悲た
その他はさうさうおひくサるまぞ葬やならされハ山上
も山り少毛あうたふ声あゝ米つるも絶らうたれも
考妣の妻とあまごうら多しとあり
美成三服棄の傳わその友あり乃佐川田昌後此
あしうたうのあまよあうとこり載らう控書史
人お史おをそとく参拜す

みづくろくちてん

まろくろくちてん

おきんしそわの

あつたき系

三川のとたをとせぬ

風此

まろくちてん

信長比五松名を昭宗



長沼燦高

長沼燦高名ハ宗教通称を外記とすその先ハ小山信成
氏ハいで長沼宗政の苗裔とす世武林の魁楚とす奥
妙長沼の城子居住祖文山城守廣輝正縁元龜の周
子あつて地を争ひて戦死し遂に其城を棄てて子庶
一族のもれとくむ伊達家子附居しつうくく廣輝は
六男外記廣次出羽の利兵衛仕へ慶長の末子あり難波の
縁十戦切ありて鐵炮頭とあり致仕は存あり信の振子よ
里く死あり子初名も及みりど息女婿中々多きありしかば
子燦高時子年四歳ありまろくちてんあふまきとあむらうて
信妙松平の城を子肉縁あり名をゆり燦高地まひその母

妹はもと子信妙子雅きぬきて松平の城を封を播州明石
子持一決きく濃州加納城子持守備高もまさこれ子持了
十一歳少して孫を多け幼ありし時聰明のききえあり眼中
雙眸ありし炯々たる電の如く見たりし時をやく書を讀
る一日の課業終むと一寸十紉俱子たる文を伴ふ雄
邁の氣象あり郷人嘆ひく奇童とす長とありて精思
力踐いさるも怠るを不し蓋しその嘉傑ゆけりうらぎ
るそくわくのどく十六歳の肘書を以て志ざりその志を誅
免たれど容れらるるさふありて退き去り母子とも少江
戸子あり其北郷子隠れ居り及を修め極を極むるを
宋字を著し願漁浩園岡の書子通じ且珍籍のそり

世子きこえり美化の刺史桑山一甲の志と支使と
厚く刺史より文を崇む武を倚人任し居り義成終
ひその英傑卓偉たるを世子は比を足し隆高常子
訪訊し刺史の寵遇も亦化子とあり刺史はるるか
く病子因りし卒す隆高の嘆きたるを道義を諱す
るふ友かく兵を説くよりれしとく悲痛きりありけ
し後年城抄伏見竹田子遷れ居り終子病子ありて身ま
くくたりこれ伏見の東山あり養春寺子葬り時小元禄三
年十月廿日あり享年五十四歳隆高世子あり日出支
去就ろく諺りれく清操名節をも汚さず其子希世の
偉人といふべしその著るところ兵要録二十二巻隆高集

解一巻抄の餘著述と多くう、三か古今の煙曉すまは
ろを園きわ得れ發せざるを岐うふすまをくす子うく
澹高の兵法を傳ふるもの佐枝尹を宮川思高の二人尤々
の巨擘たり

美成云今世子長組冠と稱す、多法ハ澹高の傳す
里出さう佐枝宮川の二派あり、その術を學ぶもの
世子あまねくさきくを要録子攻城あり、中城を
きく澹高の卓又といふ、その死已せりて人にお
よぶ、攻る乃法より、防ぎ守りかハ物のうこ
きとらあらんあつれどもその流子を要録補直兵要
録録ホの書ありて中城を説く、存進の益おさ少

うらみ予勲て云、多法をのり、門戸を強る、のいと多
くといふも辨説をりて佐機を論ず、ハ元うなき
コ子ふこそあれ流義此巧拙小く、その師術の精
練あるが肝要あり、さきか古戦軍書子んをつけ
て熟讀す、子ハ志う

佐枝政之進

佐枝政之進名ハ平重輝五郎と号す、平重父子おとこ
とともやく年いまだ二歳祿を續くとあさる、母の善言より
よりく成まき、濃州に任じて古橋の隠士、福田教房といふ
子後輩、種を交付書と号、ふ年十五歳ありて江戸
にあり、桑山一平の君に仕へ、福を食あり、この時長組澹高

在采地を賜わりのさき子三川忍高古と改め稱す長
崎子従きて言玄岱子就く遁甲の術を學び受け再ある
筑前少将りて享保元年十一月二十七日没す著とらる
関系記三十卷姉川長久子二戦記一卷あり

長崎龜女

肥前長崎子名を龜とふ女子ありその父鑄物をりて
業とせり男子あり唯龜娘ありのさきりて鑄工
の造法をりて龜娘子傳へ龜娘うりて純技此名ありそ
此人とあり嘉故不羈ありて内を好む書小丈夫と文
王遊び家産を貧しりれども生計を意とせんたむ
好事の者ありて於め數十金をわたりて銅器を

むりてあれは先その堂よりて酒肴を賄りてめめ紳黨乃
老少残振集めりて日毎小宴樂甜飲りて存子就く
物化すもとら銅色文采その技巧強技殆賞するは地
りそのころ強者某執政此命をうけりりりの龜娘を
て香爐をつりてむりて一年強事をこれと漫ふと
さき子造りてき氣色もあつりてさき子とさき子とや
強者の強もさき子時あるは紳吏をりて傳へ造りて幾
程あり香爐成まるとさき子とさき子とさき子とさき子と
よりて紳吏人多く車ありてその家とさき子とさき子と
責めりてさき子とさき子とさき子とさき子とさき子と
おれ其さき子とさき子とさき子とさき子とさき子と

州ありつて流しつてあかめ居るうしう風致のゆき子
いすいでちるる芥を拵り一声のこゑとまじりお碎き
捨る 法を修へて東歸の日に北うとまじり香爐ハつ
子調はずちん達意の人の好むをりてそのちりて奪ふ
さうとまじり好しサうん

賣酒師

賣酒師ハ何れのところ此れとてあかめ好るの姓氏を
も詳しせず自稱しつて噂とつりあるハ彦四郎と通
稱す年三十歳むりあて京師白河北西街子橋居
し書畫地よび篆刻を善くし書子備書とりてそれ
母を養ふとてまじり生計とて之れを賤賤するとあかめ

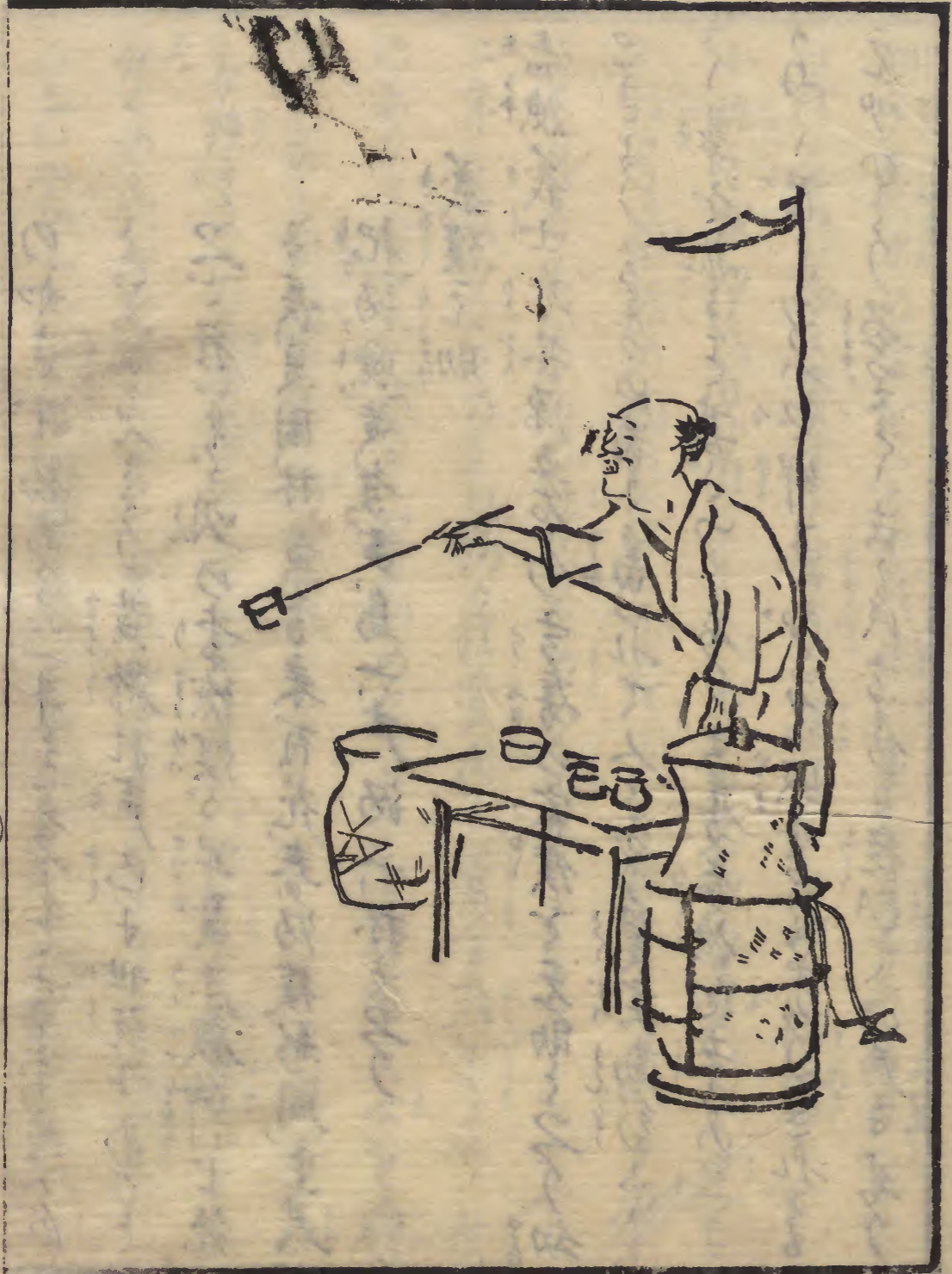
こゝに於て自嘆してあかめつて文雅ハすかをり孝養
小磯あり我れとて内家此子ありされハ内を傳り
て産業ありし親を善くし且女色ありしむりハ志
うとまじりやそ素中の書畫とてくちり教養し
る陶器酒具を購ひ求むる子於舊癖依然としてそ
の買ふところの善くし唐山舶来此品物のこゝに酒
ハ浴布乃美磁を飾りしとて七重の飾りて七つび
瀧されハその味は佳芳ありしとて醒る甚く快く
るし者程せりし門簾子竹碑銘の三文字を書し
外ハ招牌を掲げしこれ面子此肆下物一則漢書二
則雙柑三則黃鳥一聲とありしたりしハ好車の年

少つぬ子継て宴と催すあま子あうく来宿たえんされ
 ともその便ハ内此多寡子あまて贏利を食うす毎歳
 春の半子つうくハ揚花の成盛爾あうて日と不大柄内
 苦と為權ひて东山子座を設け花山の以畔子所駕き
 中々林の末おれりてハ雲葉此紗子織り以るひ車輪括令不
 席をひらき臨川福院けあう子夢りありきらる般夫湯の
 三字をまうくたる内旗を建てると遊人の認くをいぬハ
 あやしとさくハハ末ありのもあうされともその内此様好まめ
 てつ好子ハあうそひ就く飲めるとやて不丈人才子二生
 風流を愛く詩を賦く奇と翻してあま子贈る内の多
 くれハその訪方をあうて考とあう宿客の觀子傳へるごとく

美成云この書内所の傳六芥川彦章の記一つ
 九つあかりその記筆に未子論はるハこれよ
 里先事不喜喜喜喜とふ希世の名人あり書内所
 ハこれ人を慕ひル子や抑奇をこの名を約の
 人乳名と輪廻恥子き單あはれまのふは作と娘く
 至雅あて愛くて傳をつらうくこれ子贈るといふと
 たり

又三般若湯ハ内ノ異名あり東坡志林よつとそく
 わと書勢の隠語子あうりあて振牌子あう下
 物ハ子故事子按りし按ずる不世説言語子戴
 仲若春日雙柑斗内を携へ替ふ子人何く子終や

と向ふもそくくは往きく黄鶴の声を聴くこま俗
 耶の針夜詩腸乃鼓吹ありとつ同豪爽子獲
 子美其放不羈ありと内を好め皇外舅杜祁公
 が家子存りく毎夕讀書す子内一平を限りと
 す公深く特ひ抑ひて密子これを観るむる小子
 美清書張は傳をよみみくが良与客相擊
 秦白帝とく不傷子つろく堂を撫るく情い子
 擊く中らんとて遂子一大白を燭引す又よきく
 良向始居起下邳与上會於留此天以授陛下と云
 小勇りく又案を拵て君臣のお運その難きこと
 かく此如くとも復一大白を擧ぐ公笑て云く



の如き下物あつて一斗も多しとする子も
とつてて入るる黄鸞此声已子世託子ありと
とぞ移いそび明の李源漢が早夏示殿卿七絶
子長夏園林黄鸞来百花春酒復新用主人
把酒聽黃鸞黃鸞鳥一声酒一杯とぞ

義僕元助

志徳義士片岳源忠房の家僕と元助とつり幼
少きより忠房の家子畜つれて令あり篤実勤行
く事執ると甚とつり忠房志徳を去るあり
ぬく君つふ奴婢子とくを暇をころを少くされと
えゆひり留りて去る忠房子従ひて江戸子あり

朝夕薪水の勞とせむる出入奉をなして餘力を
さすこれ心を盡す昔自子勝りたあ同僚とと
小姓を報ゆるの目迫りてあ自元助を呼ひく
ハ汝も困厄の同れなきも勤めりて中興す
るも外ありて仕官を求め江戸子ありも
二年子及ぶそのうち何れ資用子盡金殆老り世
のありさむとつくとおもひめがす小諸侯子士を聘
すもかく列國客と招きこれハもかくても仕官の及
む絶えりる薦奉の令ありてハ四方子遊歴し
何くの國も身をせお裁れり子とつり一傳令
ころやすく生涯を終るとをそおり人々をのやう

おれど汝子腹をどうするなりこまじより先の生計のいと
あまをんくぐぐたごころ子腹せざるハ是半での勤仕の
勞子おめをとおまきのそ中態とてい少うせらるるど
元帥の言うことを改めの内かすハ何事ぞや僕事君
の考子今をかりておれを君の不幸ハ而日か不幸にて候
らんをささ君を守てすめりせり他のあまじ子他人とて我
誓ひくおきどこれハ君の性くをさるハ僕いふ方ても
控ひやめんくろ織席相腹の力を盡しても自勉め付
らんとておき房に汝の志これいさるも懸ふよあまじ
これ今四方子糊口しつが身すり世に容れらるるをい
うお況んや汝とてお小人の言者たんとおむひもよん汝

忍びくおき房に汝の志これいさるも懸ふよあまじ
とてハバエ助又三下殿の僕を言めとより易くいさる
衣食をて免て決して君の累とせりを僕とてよ子起
居せんとのたよりあまじたて居を別子すと君子離
さおめをんとおむひもすとして勤くんハさるふんをさる
ううこれハ言房も押うへりく一揃いこれもんを決
あまじをさるき氣をハあまじの言にこそ子控く言房始せん
すれ外陽りあうて朝あまじ不汝事吾子久くつら
まらあ子汝を志しとてさるくせさるう子好語をあて暇
ときらありそを寝るさるうハありのおま子告るの妙子
こそを奉お棟を退きの存汝が平生の所為舊時異

人の契約をさむらんやと云ふ元初も理り伏しこく
の言ふ夕を替へて命をとりぬゆ僕がほひまら
せん希六寸忠だも盡えんと其の君の為子あり
らん王と敢てあはさまあはれ今より本望を遂ぬらん
叔を一刻千金のこちちて待たざんとて去りぬきて復
健言のこころをいりり何くより来りらん拂曉言房が
出るを待たけ一管の密柑を捧げ持て諸君さあて
叔のこころをきりて濁りぬらんいざまゐるせよと彼密柑を
おのこあへ泉岳寺までつきまひ行き深江へて別
まなうくして言房死を賜ふまぐの同ある候も志むあり
しこえ助が事や常よりぬらうて涙を侍りぬまばり

一七

候もその忠節義氣をう感じさせ物色しあま
なく尋ねをあらけいも終るは行方志まじすと
あんぞえ

那阿宗助

羽州秋田の家士より那阿宗助といふ人あり
して常小村内此川普請を掌りその人乃工夫小よ
ま川を浚つる苦難多制事たり山を毀つふ車
如くあるものま水の流れは子二孔をうけてめまうす
随く自然と土を揚り穿つやうにせりりのあり又造一
枚を樹ふくけく激流ふひく切けはるの是れ何となく
勤く日あふひて溝渠の泥沙を拂ひ除くやうにせし

一七

之ありともやうなるやうの正と云ぐの蓋をたきやい今も不
その製をつくろく治水の具をく便利を爲ると多うとを
ある年所但とつる所の川善誘をせしものありしは
山の麓まで深山あればるに此谷あひし存るこそは藤ら
づくと多く残りするに地籠子造る子そのをりしもふら
色の本條十及急用のより國衛へ中つるに北は諸司の
おりの川夢後子ハ専用此のれりつるをど中あつるれど
水利の事ハすぐみの宗助子お任せられたる事あればい
出さるあふ調くきりしるその存宗助あきある村民の
子どもを集めて河系ふりお撲をそそせ我とくし
それやうくカ皇あつるものを堂へてみの色本條と一

一 廿五

幅つ横糸禪ゆさるせなればいやくもろびくろく力を
自讃すもりのあればやぐろの児軍子課せて日河系
のしるを運ぶせり地籠子結せるとににおのくあそそ
ひ我劣るく自勵をそそくとあれば日あふて幾む
くの雜費もあや敷十里の地籠成就せしつるこの存
宗助ゆとあふりある河系にて龍の形勢あつるをりし
るをゆりうろく件のるを龍形子祀りしとやその神祠
ハ城下よりハ橋とらふ橋へ通ふ及ある括系山の頂子在于
土佐ハ龍形堂とつるごとく

南川文伯

南川文伯ハ伊勢國葛野の生れにて京師小菴寺に医術

一 廿六

そのくく 産業とすまこととを治療をまじりてとらざるもなく
性又雅を事とくく 生涯を終つて 嘗て江戸を下り 久保
兄吉左衛門 とふ人此家小寓居せり 二石ハ明和四祿の存の
とあり 吉左衛門ハ三浦家の老職子て 頗風流の士あり
とあるまことと 大伯あり 江戸にみ土を知らん為とく
をり 都下を廻回往来し 至るるところ 何處子ても水
を飲み 試みその地此美悪を 辨論し たり 又著述
するところの 閑散餘祿を 携つて 名家を 訪尋し 轉宛
せしめ 餘祿子 洩れくる 話説を 記帳し たまわく かくハ
子ありて 拈して ひとつと 乞ふこと あり 帰京のころ 不
ひりたり 冊子 押たる 伴の 話説 数百 條子 あり たり

やくて 江戸を 辞せん といふ 寓居せり 久保兄氏 子 銀
小謝を 日記 此の 厚情 こと あり 謝後 不
ても 呈上し むら あり せん といふ 久保兄氏の 固辞
あり といふ 其の 意 是子の こと 白木の 籠を 籠と 賜り
り 子 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
若く あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
いふ あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
穀子 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
是 生民の 命 穀子 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
子 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
遠慮 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

一七

と和ん文伯名ハ維遷字ハ士長
東遊の時年五十歳あり
里耳順子とき人ありと云

塚原ト傳

塚原ト傳ハ常妙塚原の令あり父塚原土佐守の飯篠
長威意子程事一天嘉正傳を以てその子新左衛門
術擄法を修りてその世を早くせしむる此弟ト傳兄が
傳脈を承継きて諸國に修飾し大に名を懸けたり
その次孫あり上泉伊勢守との不陸流のを祖あり刀擄乃
達人ありト傳ふてその名を以て孫あり赴き上泉子能て
心要と究むと云ふて此ト傳が流を習ひ傳ふるのハ和軍
義輝公おひ義昭公とふ勢ありの國見是義ハ傑出たり

その化列傳諸士子ありてハ和軍子道あり其書付ト傳が威
勢さるんありて常子継承す小鷹をすゑさ乗騎の馬を
引く也位者すぐ七十八人を引つゑありきと云ふその行旅
おひやまぐ一説子ト傳刀擄の術に達し自一泓を以て其
子勝流と名のけりあり付東國へ下向の及れを以て和妙
共きの後り子て乗名を主人一船子のりありてその中子
年三十七八歳ありけり男長言々髭鬚を以て言談とあり
くくみの船中子て兵法秘術の鍛錬精熟を自らしその言々
傷者衆人のやまひありト傳ハ耳まきけり何れも顔色子
てうち取つてありてあまり此通言子と云ふ男子むかひ
ていひるゑさても推さるゝのめ此語を以てのり子殊にま

持がまきハ名匠の杖言ありこれ弱冠の頃より親師授けしを
盡したるといふも今も人子勝んとして習を以て負ぬ工夫の外
化事ありといふもの男はて此坊ハいづれも傳へしき名匠あり
何派ぞと問ハバやとよこれハ人子負ぬ無手勝流ありと答ふ
男も無手勝ありんハ腰帯帯したる両刀ハ何の為ぞと之がト
傳言以心傳人の二刀ハ我慢此拜を切り悪念の萌を断あり
とつ小男のさふハ此坊とはあひをいささんハ手無くして勝
たずんやト傳我が心の剣ハ活人剣ありども對する人悪人あれ
バそのまゝ殺人刀とあるなりといふを男もあらず腹子すゑ
うめて船人子向ひていさるハ此舟をいそぎ陸子著す平
しく勝負を決せんと忿然といふ氣をそへ久あつては

ひそ不同船の人々もいそぎせ船人子お圖していひはるハ陸
子てハ往還の者多く觀者の多く人ハ坊ありてあの名匠の
孤高こそよかれとていぞ人子負ぬ無手勝流の修練の多あり
をい参り入るん乗客のあつても急ぎは磁石あつたれどあ
ままで押せし一鞭あれといふ船をいそぐせう此島子著く
といとてやりの男三尺ハ寸の大刀とするりと抜きをち岸上
子飛あつて此坊の美類ニツ子かきんのをぎあがりゆくと罵り
られバト傳志がけし坊も人子無手勝流ハ心を静ふせぬ家
らぬとありといふ業をさうくげ腰の両刀をハ船人子さら
すありその水掉を我子ゆきよとて船梁子三あり水
掉子て向ふれ岸へひらりと飛が中とていそぐがさつを

船とちまの沖へつき出たりあり男二れを見ていふ小坊ハ
あがりぬをぬやと必ト侍ゆりあがりやんき口をくくバをを
およぎく事りたま一則さづけく引守せん幸手膝流ハ是か
まこと言声子笑ひルレハ男あまりれを念さふわくまきれ
返せぬとせといひルレどもさき子少入ず湖ありまらう子隔
て海をひらき振まつ此ら多結の板極をばさめて殊勝
子押ふて一執心あふまきく侍んささくといひ控く山
田村子つきらうとあふ書子見らう

風外禱師

風外禱師ハ知ときより艱修中して如來書名の教を信じ
論を諍誦し長とありく難深し修塵を拂ひきりて身を
一

一 北

水小まらせて大徳の知識ありと受けばうあはれ修く
この浮物外お南渭川わあおの禱師子謂して修名徹底と
たりとく用暇あまは達磨大師此徳を画きく人子あふそ
の著書尤も超凡ありく奇絶く小児輩未む時ハ修く
その著あり子應じてあふきあふ大人あふあふ小通る乞ひ
ゆれハ唯笑て答つざるの世子風外の達磨とくといふ
玩ぐりお物曾我中村子修く穴居せりありその穴居り
あとい子存せり土人喰ひく風外亦くそのひて所ハ寒
暖子よりく居を移せとそ後小笠原山中子一幸此竹菴
と結ひ修く比山村へ杜舞小出ら子里民輕蔑しとを
の徒とのこあひあうううあう日急雨子修く時根石河

一 二

のやと大ききものを何れをく顔に戴き雨を凌ぐ坐す人
 て出られしとんく整へて神師の君幸れ今あはるると知
 て是よりそ教せしとんく者小人を思て清く白無子
 々れろ自父母の遠像をる彫刻し朝夕香華を備へ肉
 思を謝しとんくさてある附國の吉山田系侯の此山中あは絶景
 の勝地をそとて精舎を造りて長興山と号し風外神師
 を迎へて恒持せん王と号ひて諸山をめぐりて固辭し
 肯せしとんく黄檗の秋牛おるを招きて風山とせしとんくてあ
 る日侯の秋牛おるを伴ひて風外神師の竹菴に訪はれたり
 時秋牛おるの風外神師におむひてとんく世を遁れて新羅子
 修徳せんといふとぬがとんくこれとおかすのそとんく風外神師
 三

世を遁るいとやすし出家も成やすし持の生類に成る
 柳子法あられと安ん園房方服し心は在信子あられ
 里まこと小世ハ控安くしとんく控さきとんくのそとんく笑
 談鼻をうらす





さて此の日國（日本）此寺（此寺） 夙外（夙外） 禪師（禪師） を景慕（景慕） のありきと修（修） と
 草菴（草菴） を再び（再び） 同（同） ありきと存（存） 此衣布（此衣布） の裏（裏）
 具（具） 此（此） 朝夕（朝夕） の資（資） 知（知） の遺（遺） 一（一） づち（づち） 行（行） せん（せん） 此（此）
 在（在） を考（考） ん（ん） よう（よう） て破（破） 編（編） を箇（箇） と（と） 石（石） 像（像） 二（二） 死（死） を取（取） り（り） あり
 くとあり

美成（美成） 三（三） 夙外（夙外） 禪師（禪師） が雙親（雙親） の石像（石像） ハ今（今） 江戸（江戸） 雑地（雑地） 子
 三（三） の一の（一の） 中（中） 田（田） 系（系） 長（長） 福（福） 葉（葉） 家（家） 此（此） 下（下） 郎（郎） 子（子） 存（存） り（り） とい（い） う（う） 者（者）
 三（三） よう（よう） 一（一） 子（子） 上（上） して（して） 唯（唯） の老（老） 練（練） と（と） 稱（稱） 一（一） 小（小） 兒（兒）
 百（百） 日（日） 噴（噴） 此（此） 衫（衫） 彩（彩） を外（外） 一（一） 快（快） 氣（氣） す（す） 時（時） ハ（ハ） 煎（煎） 茶（茶） 子（子） 茶（茶） を
 考（考） ん（ん） 其（其） 身（身） 向（向） り（り） 一（一） 六（六） 八（八） 貞（貞） 享（享） 三（三） 年（年） 福（福） 葉（葉） 家
 類（類） 存（存） 一（一） 國（國） 之（之） の時（時） 雑地（雑地） 中（中） 田（田） 系（系） あり（り） 一（一） の（の） あり（り） 列（列） き

移りてとてや



再掲つぎずるら一説い子こ風外ふうがい禪師ぜんじハは五戸ごこ祇園ぎえん寺てらのの産う
 首くび子こてて心こころ越こ禪ぜん師しハは越このの子こ伊い豆ま子こ住すみみのの卵たまご
 塔たハは戸こ駒こまのの言こと舟ふね子こ存ぞん在ざいリりそそハは言こと林りん寺てらのの見けん山ざん
 和尚おしょうとと風外ふうがい禪師ぜんじとと六む方ほう外がいのの友ともとと其その外がい態たい
 意い小こててありありととルるババ冬ふゆのの内うちハハ一いつつもも言こと林りん寺てら子こ考こう前ぜん
 一い夏なつハハ伊い豆ま山さん中ちゆう子こ住すみみ一いがが此こゝ者ものハハ考こう前ぜんのの言こと
 ハハ人ひとのの相かひ同どうハハ一いととありありとともも考こう前ぜんまでまでありあり考こう後ごするする
 ともともれれくく圍ま基きををどどをを傷やりりおお見みええるる事ことののここととをを
 されされババ一いののちちよよてて遷せん化げありありととありありそのその後ごふふ
 政せい室しつ風ふう外がい鳥とり知ち禪ぜん師し 正徳三年二月十四日
 とありあり一いのの説せつはは石いし書しょありあり風外ふうがい禪師ぜんじのの時代じだいハハ正

あまの世小補を好むいふものハそれ精を重んずるもの
ありとてそのかゝりて急郷ハ疾を救ふの功多し其子居
るよりあつたれば業を授けんとて弘く後とて元文三年子家
孫を招きて居を承け子移り古園才を倡げり時子年三
十七歳自云られ我家を興すとあつた今迄をわけて居れ
たことハ本姓を汚すとせむとて氏を吉益と改めり
曾祖政慶紀伊子居子天正年間豊若岡をひきあて紀伊を及
るの附政慶階級しつゝ海内子終き吉益正笑あり家子匡礼
より半笑高志島山の族あり世々重産産科をつとめて世子名
あり吉益源とつゝ弟洞二れ子より吉益氏を冒すあり
この附医業控いあつたあぬを終つたれば門弟進むこと
ありたれど賊子あひて家とさう貧しくもれど土俵人せ
造り響ききく生計の助けと成るそのころ莫逆の友ありる

二二四

村尾業といふ人仕友を勧むるに奈洞書と贈り扱ひて
云ふいふ子ハ我知已ありとせむいふる小今ハ日まを
るもの子あつた我業くくろ老親ありとも志を降く
く祖先と尊むることを為人や貧ハ士の事少く窮乏ハ
存けりたとい術ハ行なれずとも天の形及をばま表し
ててろく仕へを求めずれば貧困もく甚く治計
の術あなれば高戒断言して五條あり少彦名廟子訪り
祈念しつゝ云為則不肖此子して過ちて古醫及志
くく世の醫業をとりて推してを致す子今巴子用
三子子迫り命且又子ありらる醫及の形ありて天の罰す
る子貧ありしむるれさるハ非明の照耀を垂れりて我

二二五

命をすまはるる子ありあめりんと云ふ形ふところありと懇
祈しく帰れりその頃舊お職ある愛孫の許子往り
子への愛孫いとよみていひて金子と申す東洞子興へ云
吾あれども鎌倉ありこれを買ひて先生の愛を助けま
らばるるありと云ふ子東洞おせりき固辞して云これこの
金子と云ふまはれおくおと請うるもおゆるの目あり
といひられお愛孫気色と云て云これ何ぞ償を望の意
おんやと先生の為の事ありと云ふ天下第民の性
命を救はんをせよと申すおゆると云ふ言を感
じ懐くし細免これより家資やうくおと云ふ言を感
お付一人の病者を治療せし山脇東洞その名あり

て東洞の茶割を少して大よまらおびそのま方の油膏を感
じたりと云ふ此茶を服用しと云ふ病者日ありて懐気
せりて東洞の尋常一板の人ありと云ふと知りて東洞あり
と云ふを結ひて親友と云ふ東洞の名これあり大よ世子歎息
たりと云ふ東洞の常子と云ふ名をいへりて云へりて寛延四年
年五十歳ありて難儀方茶微方極を撰りて古醫此規則
を尋りてその東洞の人とあり別強篤実ありと云ふ容貞す
てつる卓絶感風塵と云て云髪帽毛の如く服を人
射り子似る世人ありと云ふ信ありと云ふ髪ふれおれども
さつと云ふと云ふ晩年中侍候祿五百石ありて招き
とも固辞して仕へ安永二年七十二歳ありて没す

至長と名ハ秋字ハ修次を名ハ徳字ハ子直次と名ハ
辰字ハ子良と名ハ

和泉屋甚助

和泉屋甚助一号と名申と号ハ江戸三十間坊下住と号
材木をりて産業として富家の高買ありひたすら
名声のきくんと号好む此癖ありうろく荷田春満の門
子なりて抄りて奇書を刊行して己が名をも不朽の傳
へんと号春満子と号子周市令義解ハ流布の色又おれハ
技刻して扇典を補うといわれうろくバヤウといさう標
印をかく巻尾子名を記して上本と号おもて易の經傳釋文
をも技刻し松宏関脩齡の改文を謄くこれをも標印をかく

一書肆子あえて何事なく世に流布せしめあるハ本居
龜井戸天満宮社既小連歌乃會席を造立して言説
つより歌をゆりてと江戸煙草名誌志子名をりて
て徳田の名家ハいふもさうあり商人烟師やまの雜技
の後までおもおもねるを交りちあををりておも
風俗浪のともぐらうまをふおもくせりて名のみり
すえんとを号してうろく自著の書江島大徳紙大申歌
話おありうろくたあくせり存せり松崎勸海集子字の
申の一絶あり

殉内知名三十春厭看花柳惹紅塵未尋垂清淨
槎路也学成都夢卜人

境至ハ沙州西福寺ありと云ふ

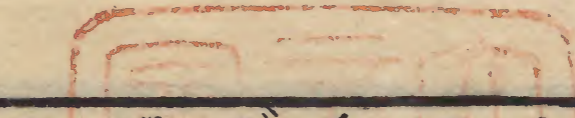
三十七

美成云々左申ありとあり文學子と云うは文雅
子虚名を求めむと云ふもさしてハ芳を子載小
傳人との雑きをありとせめてハ臭と万世子
慈さんと此海と子や左申の名を弘くき録
小左申際といふを伝へておとく通の家
吉原の若女巴屋の豊里と云ふ子著せ縁纏といふ
わけふその際を著しつゝあつの内姿をあらうせよとハ
我場と云く中村傳九郎と云ふ書子もあへてハ
左申際もあまなく世子弘くおとくおとくハ
て呉彼屋の足世子行くと云ふ左申際やあまなく
君と云ふ

その家ありて子代左申際といふ名をあらうと云ふ形
ごとくと云ふ子左申と云ふ太申と云ふこれ如き紋あり
いふと云ふその世不傳九郎際と云ふのと云ふ若くは
やまて沙州古境内に梅樹ありて極く左申様
と名づけ井通應の文と註ひ碑と建てしと云ふと云
左申様といふと云ふと云ふと云ふ我場様といふと云ふ
又左申ありてと云ふ人足子おとくと云ふておとく左申
さるハ様とお好といふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
この類ひは事跡といふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
を破れといふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
板坂ト云ふ

板坂ト云ふ

三十七



板坂ト高名ハ如春存子意高と称すその先甲抄向家
 の匡々ト高医療子園子たるをゆき被送とあるは
 沙州子住あり久々末人馬仲虎が編年互見圖を授刻し
 て世不朽ふ蔵書甚だ多し浅草又庫の印記あり々々
 世子散在ありその文庫此地ハ浅草ちのうらあり富士権現の
 前子ありその地子稲荷の山ありを子初土切ト高稲荷と
 了文庫の旧地ゆき此西妙あり元々の詩あり微とす
 浅草川西一十靈新年風暖見春蔬向月元末年
 版更護時珍綱目書

美成云ト高の奉蹟くくくハ医瑞子くくく

名家畧傳卷之一

